

埋文にいがた

No. 85

2013. 12. 9

財団 法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

平成25年度発掘調査遺跡の紹介

山口野中遺跡 (阿賀野市大字月崎地内)

山口野中遺跡は、阿賀野川右岸の自然堤防上に立地し、現代の水田面の標高は6.4~6.8mです。一般国道49号阿賀野バイパスの建設工事に伴い、平成24年度に続き、2度目の発掘調査を行いました。これまでの調査で縄文時代・平安時代・鎌倉時代の遺跡が見つかっています。今年度は、平成25年4月から11月まで、延べ14,857m²（縄文時代:5,482m²・平安時代:5,616m²・鎌倉時代:3,759m²）を調査しました。このうち、今回は縄文時代（晚期後半：約2,500年前）について報告します。

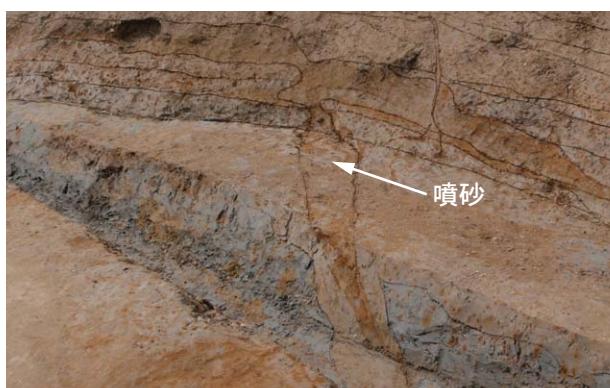
縄文時代面は水田面から約1.3~1.7mの深さで検出しました。縄文時代の地形は、調査区南側は微高地となっており、北東・北西方向へ向かって緩斜面を形成し、北側は低位面となっています。また、遺跡内には地震により液状化して砂が噴出する噴砂の痕跡が認められます。土層の堆積状況から、遺跡は縄文時代晚期以降、鎌倉時代までの間に少なくとも2回の地震に見舞われていることがわかりました。

遺構は、堅穴建物1基、土坑4基、焼土・炭化物の集積48か所、埋設土器3基、ピット18基などがあります。このうち、焼土・炭化物の集積は、遺構の中で最も多く、大半の焼土からは白色の微細な骨片が出土しています。炭化物層からは、土器・石器のほか、植物の繊維を撚り糸状にしたものに赤漆を染ませ結束した糸玉、祭祀遺物と考えられる石冠も出土しています。埋設土器は、一度大きく掘った穴に土器を設置したもので、2個1対のものを正立に埋めたもの（埋設土器824）がありました。上の写真左側の土器は直径16cm、高さ23cmほどの大きさです。堅穴建物（SI860）は、直径約6mの円形で、深さは約20cmあります。中央付近には赤く焼けた土があり、炉跡と考えられます。柱穴は4基見つかっており約20×20cm、深さ約35cmの円形に掘られています。遺物は、縄文時代晚期後葉の土器・石器が出土しました。土器の文様は、幅の狭い隆線によって作り出される「浮線文」と呼ばれるものが主体で、このほか、東北地方から搬入されたと考えられる土器も少量認められます。

（株）帆荔組 村上章久）



埋設土器824 出土状況



液状化の様子



堅穴建物(SI860) 遺物出土状況

たから
宝 田 遺 跡
(柏崎市宝田)

宝田遺跡は、柏崎平野北東部の鯖石川左岸に広がる水田地帯の中にあり、標高4.5mの沖積地に立地します。一般国道8号柏崎バイパス事業に伴い、平成25年4月から11月にかけて、平安時代（9世紀後葉）、中世（鎌倉から室町時代、14世紀）の水田を上下2～3面で検出し、延べ約7,000m²を発掘調査しました。

上層の水田は、遺物の出土量は少ないですが、珠洲焼の甕、土師器皿、青磁、渡来錢（熙寧元寶・洪武通寶）などが出土していることから中世の時期と考えています。水田は南北方向の水路を間に畦畔を東西南北の方向に合わせて長方形の水田区画がなされていました。調査区の南側では、意図的に埋められた幅1～2m、深さ80cmの大きな土坑が10基見つかりました。水田に関するとして水溜の機能を想定していますが、あるいはコイ、フナなどの淡水魚を寄せる仕掛けだったのかもしれません。

下層は、平安時代の水田とその水田開発に関係した建物などが見つかりました。建物は梁間2間の東西棟掘立柱建物で、桁行は調査区外に延び全体はつかめませんでした。1基検出した井戸は建物の北西側に位置し、上端幅1.2m、深さ1mで良好な状態で残っていました。壁面の四隅には井戸の崩壊を防ぐために木杭が打ち込まれていました。この井戸の埋土から完形の土師器碗が2点出土しました。井戸を廃棄する際に祭祀が行われたようです。水田は、東西方向の畦畔の間を南北方向の小畦畔で長方形に区画していると思われます。田への利水は、水路近くの田から取り入れ、田と田は小溝でつながり水路から遠い田にも水が行き届くようにしています。水路が分岐する地点（堰）、田へ水の取り入れ口（水口）付近では細い割材の木杭が打たれていました。水量の調整をしていたようです。また、注目すべきものとして、おにぎり状の炭化した米（ご飯？）の塊が出土しました。時期が平安時代のものか、中世か特定できないので年代測定分析を急ぎたいと思います。

「宝田」の地名にふさわしく米どころで、平安時代から現在まで米作りが続けられています。その出発点は平安時代の水田開発からで、宝田遺跡はその拠点のひとつであったと思われます。 (飯坂盛泰)



遺跡の近景(上空北から)



井戸の埋土から出土した土師器碗



平安時代の水田と水路



おにぎり状炭化米

平成25年度整理作業遺跡の紹介

みの 箕 輪 遺 跡

(柏崎市半田字箕輪・同市琵琶島)

箕輪遺跡は柏崎平野南部の沖積地に立地し、海岸からは3kmの距離にあります。標高は4m前後で、現在は水田が広がっています。一般国道8号柏崎バイパスの建設に伴い、平成8年から12年の5年間にわたって発掘調査を行いました。調査面積は約27,000m²に及びます。現在、遺物の実測を中心に整理作業を進めており、平成26年度に報告書を刊行する予定です。

調査区東端部では平安時代（9世紀後半～10世紀初め頃）に流れていたと思われる、幅約5～10m、深さ約1.5～2mの河川跡が見つかりました。土師器碗や須恵器杯といった食器類が重なるように出土し、その中には「上殿」「見」と書かれた墨書き土器や、内面黒色土器も多く含まれています。このほか当時高級品であった綠釉陶器も見つかっています。また、木製の皿や椀、曲物、農具などの日用品のほか、斎串・馬形・刀形などの祭祀具も出土しました。流路が蛇行する部分にはテラス状の遺構や階段状の段切が存在し、川岸の西側では梁間4間（約10m）、桁行6間（約12.4m）の大型掘立柱建物が見つかりました。

調査区の中央部から北側では、掘立柱建物が大小13棟見つかりました。北端で検出された3棟の建物の近くに

は、南から北へ向かって流れる河川跡が存在しました。その中からは、8世紀後半～9世紀初め頃の土器や木製品が多数出土したほか、黒漆塗りの壺鎧（馬に乗った時に足を踏みかけるもの）や黒漆塗りの銅鎧（腰帯につける飾りで、役人が身に着けたと考えられています）が発見されました。さらに、6点の木簡が出土し、そのうちの1点には「駅家村」と記されていました。律令体制下では、都と地方を結ぶ道が整備され、越後には駅が10か所置かれました。木簡は、何らかの物資を駅家村に運ぶことを命令するもので、命を受けた使者が駅家村で目的を果たした後、遺跡付近で廃棄したものと推測できます。これらのことから、遺跡付近に「三嶋駅」が存在し、北陸道を通る古代の官道があった可能性が高いと考えられます。

(坂上有紀)



遺跡遠景(南から 奥は日本海 白線内が調査範囲)



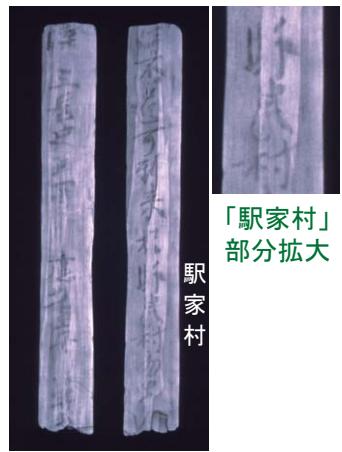
東端部の自然流路遺物出土状況



自然流路から出土した土器・陶器



黒漆塗りの壺鎧



「駅家村」部分拡大

駅
家
村

木簡の赤外線写真(表・裏 長さ約26cm)



会期：平成25年9月13日～平成26年2月23日(休館日12月29日～1月3日)

平成24年度から「越後国域確定1300年記念事業」として、埋蔵文化財に関する講演や展示等の様々な催しを行っています。平成25年度は弥生・古墳時代をテーマとしています。新潟県埋蔵文化財センターのエントランスホールでは「遺跡が語る弥生・古墳時代の越後」を企画展示しています。

ここでは展示の見どころをご紹介します。

なお、展示の概要及び展示解説資料は（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団ホームページの「おしらせ」ページ内「展示」からもご覧いただけます。



新潟県埋蔵文化財調査事業団ホームページ
<http://www.maibun.net>

■土器の移り変わり

稲作の導入で食生活が大きく変化しました。縄文土器はゆっくり煮込むシチューのような調理でしたが、弥生時代以降の炊飯は土鍋に蓋をして短時間で加熱するものでした。調理物が変われば土器（土鍋）の大きさや形、配膳方法が変化します。展示では時代による土器の変化やそれに伴う生活道具の変化（石器から鉄製品へ）を追っています。

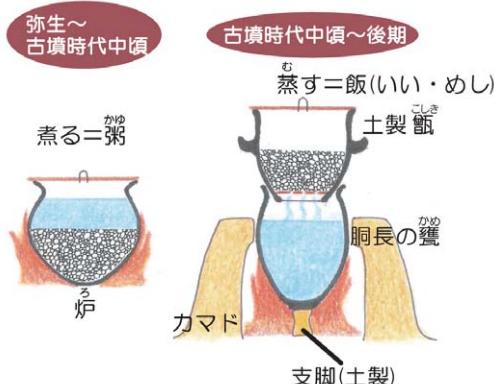


土器の移り変わり

■土器に残るコゲから使用方法を探る

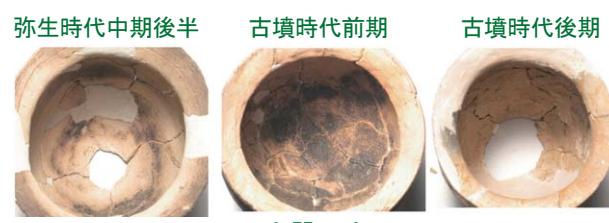
縄文時代以来、調理施設は土器を直火にかける炉でしたが、古墳時代後期にはカマドに変わります。炉に掛けた土器の内面にはコゲが残りますが、カマドに据えられた水を湧かすための土器にはコゲが残りません。カマド導入前は米を炊いて（煮て）いたのが、カマドでは米を甑で蒸していましたことがわかります。

このほか、古墳の副葬品（土器・鉄斧・鉄剣など）、木製農具、玉作り関連の遺物などを展示しています。是非、実物をご覧ください。



米調理法の変化(炉からカマドへ)

出典:『柏崎市史 上巻』を一部改変



土器の内面

左2点は炉に掛けたため、コゲがついていますが、右1点はカマドにかけて蒸し器の湯沸かしに使用したためコゲがついていません。

第19回遺跡発掘調査報告会を開催しました

11月17日（日）に新潟ユニゾンプラザにおいて、「第19回遺跡発掘調査報告会」を開催しました。当日は244名の方々に御参加いただき、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団の平成23・24年度の発掘調査成果報告を行いました。また、発掘調査成果を出土遺物や写真パネルなどを用いて展示し、各遺跡の調査担当者が遺構・遺物の特徴について解説しました。

お忙しい中、報告会や展示会にお越しいただき、ありがとうございました。

報告会発表遺跡の概要

小船渡遺跡（新発田市）：鎌倉・室町時代の集落です。加治川が作り出した扇状地の先端部に位置します。周辺には「舟」に関連した地名が多く、一帯が内水面交通の拠点であった可能性があります。遺構は井戸・柱穴などがあります。遺物は青磁・白磁・珠洲焼等の陶磁器のほかに、錢貨や蓮華経の一部分が書かれた経石などがあります。



町上遺跡（魚沼市）：縄文時代中・後期の集落です。魚野川右岸に注ぐ水無川扇状地（通称：八色原）の北端に位置します。遺構は中期の堅穴住居や後期の掘立柱建物などがあります。遺物は多量の土器・石器、魚や動物の焼骨などがあります。特にサケ科の歯骨が大半を占め、魚野川に遡上してくるサケを集中的に捕獲し、食料にしていたようです。



二反割遺跡（上越市）：平安時代末期の大規模な堀で区画された集落です。高田平野のほぼ中央、飯田川右岸の自然堤防上に位置します。遺構は掘立柱建物・井戸・溝などがあり、掘立柱建物は2～3回建て替えられています。倉庫と推定される建物もあり、村落領主などの有力者の存在も想定されます。遺物は珠洲焼、白磁や土師質土器などがあります。



六反田南遺跡（糸魚川市）：縄文時代中期の大集落、古墳時代前期の集落、奈良・平安時代の集落が同じ場所に断続的に営まれていました。注目されるのは、廃絶後に洪水堆積物が厚く覆っていたため、当時の姿を良好に保っていた縄文時代中期の集落です。地の利を活かして地元産蛇紋岩を利用した磨製石斧の製作が行われていました。集落は居住域と廃棄域が列石で区切られています。廃棄域は縄文人が長い年月の間に食べカスや土器・石器などを捨てた結果、何層にも重なり盛土状に堆積しています。ここには、乳幼児の埋葬施設と考えられる埋設土器もあることから、廃棄域が単なるゴミ捨て場ではなく、役目を終えたモノの「おくりの場」であったことが読み取れます。

※第19回遺跡発掘調査報告会の当日資料はホームページの「おしらせ」ページ内に掲載しています。

埋蔵文化財センター展示替えのお知らせ

上記「第19回遺跡発掘調査報告会」の展示品の一部を平成26年3月から6月まで埋蔵文化財センターに展示する予定です。当日の展示をご覧になれなかった方は、是非お越し下さい。

県内の遺跡・遺物83

国指定史跡佐渡金銀山遺跡 鶴子銀山代官屋敷跡

(平成23年2月7日指定)

(遺跡所在地:佐渡市沢根字大官屋敷2494番地ほか)



鶴子銀山は、越後国の商人外山茂右衛門が佐渡に渡海した天文11年（1542）に発見したとされ、西三川等の砂金山を除くと佐渡島内の鉱山のなかでもっとも歴史が古いと考えられています。

『佐渡古実略記』には「或時夜に入り、沢崎沖から沢根を見れば、鉄吹炎のごとく光空にうつり、近く船を寄せれば、沢根の奥山に金氣の立つ様子が見えた」と発見した時の様子が書かれています。

「鶴子銀山代官屋敷跡」（以下代官屋敷跡）の正確な記録は残されていませんが、同書に「天正17年（1589）上杉景勝が外山に陣屋を建てて山口右京を目代（代官）として置いた」とあり、「陣屋は天正17年以前よりあったといわれている」と書かれていることから、この「陣屋」が当該遺跡と推測されます。

代官屋敷は、慶長8年（1603）佐渡代官の大久保長安の命により、相川に陣屋（後の佐渡奉行所）が移されるまでの間、金銀山を統括するために機能していましたと考えられます。また、同書には慶長2～8年（1597～1603）に河村彦左衛門

（大久保長安の前の代の佐渡代官の1人）、慶長9～15年（1604～1610）に保科喜右衛門が同所で鶴子銀山を治めたことが書かれていますが、これ以降、代官の名称は現れなくなることから、代官屋敷が置かれた時期は、天正年間（1573～1592）頃から江戸時代初期までではないかと考えられます。

代官屋敷跡は、鶴子銀山跡の南側、しなみ沢左岸の高位段丘上、標高約110m付近に立地する遺跡で、南・東・西側の三方向を沢に囲まれ、北側には「鶴子道」と呼ばれるかつての幹線道が通っています。ここから北側の山中には鶴子銀山の採掘跡が広がり、東側には鶴子荒町遺跡と呼ばれる、かつての鉱山集落跡が残されています。また、鶴子の主要な間歩である鶴子本口間歩まで約100m、百枚間歩まで約500mの位置にあり、銀山を統括・経営する絶好の場所に立地しています。

平成22年度の発掘調査では、斜面を造成した平坦地群や、これらを東西に区画する土壙が確認されました。土壙は土を盛って搗き固める、中世城館に見られる「版築」に近い技法が用いられています。

翌23年度の調査では、扣石や磨石などが出土したほか、鉱石の粉碎・選鉱に関わる遺構群（作業場）、灰吹法に関わる製鍊炉1基を検出しました。これらは、近世初期の鉱山集落である上相川遺跡の選鉱・製鍊技術の変遷を比較・検討する上で重要な発見であるといえます。

（佐渡市世界遺産推進課 濱野浩）



(左)炉跡 (右)土坑をつなぐ溝跡と出土した扣石

埋文にいがた No.85

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1

T E L (0250)25-3981

F A X (0250)25-3986

E-mail : niigata@maibun.net

U R L : http://www.maibun.net

印 刷 阿部印刷株式会社